

Janet Frame の *An Autobiography* について

佐藤 幸子

(1)

ニュージーランドの作家 Janet Frame (1924～) は *An Autobiography* (1989) において次のように述べる。

‘From the first place of liquid darkness, within the second place of air and light, I set down the following record with its mixture of fact and truths and memories of truths and its direction always toward the Third Place, where the starting point is myth.’ (p.7)

つまり祖父母の故郷であるイギリスは Janet にとっては ‘liquid darkness’ であり、彼女は ‘the second place of air and light’ という現実世界でこの伝記を書くが、その方向はつねに ‘the Third Place’ つまりニュージーランド (以下 NZ とする) を向いているのである。

NZ の病院で「精神分裂病」と誤診された Janet は NZ から逃げ出し、イギリスやスペインで暮らした後ついにふたたび NZ への帰国を決意する。Janet の友人で優れた作家である Frank Surgeson (1903～) は ‘You’ll never be able to write intimately of another country.’ (p.415) と Janet に語る。しかし彼女が NZ に戻ろう、そこで作家として新しい出発をしようと決心することができたのは単にそれだけの理由で可能になったわけではない。そこにいたるまでロンドンやスペインのイビサ島やアンドラにおける様々な人達との出会いや経験があり、それらが彼女の心の傷を少しずついやして正常(?)な人間としての自信を持たせていくのである。特に異性との出会いと愛によって、人間として成長して、結局自分のアイデンティティは NZ にあることを悟り、NZ へ帰国する。本稿においては *An Autobiography* 三部作 (‘To the Is-Land’, ‘An Angel at my Table’, ‘The Envoy from Mirror City’) の Vol.3 ‘The Envoy from Mirror City’ にあらわれる彼女の幾つかの恋愛を中心として、その心の軌跡をたどりたい。

(2)

Janet Frame は小学校教師としての研修の最後の日、授業が始まる直前に彼女の授業を見にきた視察官の前から姿を消してしまう。作家になりたいという自分と教師になることを期待されている自分との矛盾に苦しんで、身動きならなくなってしまったのである。ついに自殺を図って病院に入れられ、精神分裂病と診断されてしまうが、彼女の書いた短篇集が文学賞を取ったため、ロボットミ手術を受ける直前に病院を出ることを許される。

前述の Frank Surgeson は Janet が再び精神病院に入れられる恐れなきにしもあらずであるから、その前に NZ を出た方が良く考える。この時代の NZ の人々が海外へ出ていくのは経済的理由ではなく、より文化的なものを背景としていた。彼らは作家 K. Mansfield (1888～1923) や、物理学者 E. Rutherford (1871～1937) の例を見るまでもなく、‘maturity’ を求めて国を出ていった⁽¹⁾。

Janet も ‘broaden my experience’ する為に海外旅行をすることを決め、文学助成基金からの援助を得て、ロンドンに旅立つ。

ロンドンに到着した Janet は '*London Magazine*' に詩を送る。この頃の Janet は当然のことであるが NZ を否定する姿勢を取っている。彼女は自分を最近西インド諸島からロンドンに来た詩人であるとのふれこみでその詩を書いている。その理由のひとつは自分の詩が下らないものであることを隠すという自己防衛のためであり、もうひとつの理由は当時の NZ 人は '*more English than England*' (p.308) と考えられることは、立派なことというより恥ずべきことであると考え、自分の国の外側にアイデンティティを求めようとしていたからである。(p.308)

その後スペインのイビサ島に移り、平穏無事な日々が過ぎていく中で、Janet は自分の未来について考える。もし助成金を使ってしまったらあとは NZ へ帰る以外道はない。しかし彼女は NZ を離れて外国に暮すと非常に居心地が良く、さらに、Janet は自分が精神病でないと確信していたが、NZ の医者の下した「精神分裂病」との診断が正しいかどうか、ロンドンの医者に診断してもらわなければならない、NZ へ帰るわけにはいかなかった。

(3)

ロンドンに暮らしはじめて最初に知り合ったのが、法学を勉強している '*Someone in the city*' 風の Nigel N. であった。ナイジェリア出身とニュージーランド出身の二人は多くの共通点を持っていた。どちらも大英帝国の「植民地人」であり、共通の教育、つまりイギリスの歴史、制度、文化、自然などについて多くの教育を受けていた。映画を一緒に見るようなつきあいであったが、彼女は彼をそれ以上は受け入れる気にはなれなかった。彼女は '*the distractions of living might threaten my desire and time to write.*' (p.313) ということを考えたからだ。その自分の臆病を恥ずかしいと思いつつも、彼女は '*I was unwilling to take the chance.*' (p.313) であった。

本当の意味で '*my first friend in London*' (p.306) と言えるのが、同じ下宿に住むアイルランド出身の Patrick Reilly であった。彼はなにくれとなく Janet の面倒を見てくれるが、次第に彼女に干渉するようになる。Janet は Patrick のことを好きでなく '*I did not really like Patrick Reilly. He reminded me of those I had lunched with in my far-off school days because there was no one else available.*' (p.319) と手きびしいことを述べているが、彼のような友人を持ったことは彼女にとって幸運なことと言わなければなるまい。このあと彼は肝心な時に大切な役割をはたしてくれるのである。

Janet がロンドンを引き上げてイビサ島に行くことを彼は不承不承に受け入れたが、'*fancy free*' (婚約者のいないまま) でロンドンに戻ってきて、そのあときちんとした仕事に就くべきであると断固として主張していた。仕事をぬけ出して駅まで別れを告げに来た時、またも言うのだ '*And stay fancy free*' (p.322) そして '*Keep in touch*' と。日頃 Patrick につれない Janet も彼の不確かな人生を思って涙ぐむのである。

Janet は '*Patrick was homely and ordinary with little trace of romance or excitement……*' そして '*Our conversation was dull*' (p.321) と酷評しているが、Patrick の存在はこのあと彼女にとって、大切なものになっていくのである。

クリスマスになると彼は手紙と食料を送ってよこし、またも '*still fancy free*' と書くのである。

Janet は Patrick Reilly の存在をいささか軽いものと思い込んでいるが、実はそうではない。Patrick の存在ゆえに彼女はあとで背徳という贅沢な感覚を知るのである。また彼女はイギリスを去って NZ に帰る時、見送る人なしで旅立つことは出来ず、あえてその役目を友人に依頼するのである。そういう彼女にとってイビサに向けてロンドンを発つ時、仕事を休んでまで見送りに

来る Patrick の存在は重いのである。

アンドラからロンドンに戻った時には Patrick が駅に迎えに来ており、部屋まで準備してくれていた時、彼女は素直に感謝するのであった。

(4)

イビサ島に到着した Janet は同じ下宿の間借人 Edwin から近くに別荘を持つ Bernard を紹介される。Janet に決定的な影響を与える Bernard との出会いである。Janet は Bernard の笑い声にたちまち魅きつけられる。‘The sound seemed to have the right assembly to connect with a jagged shape inside my heart’ (p.344) と表現する以外に彼の笑い声を聞いた時の喜びを説明しようがないのであった。彼の声は ‘a rich voice that sounded like chords of music to my already enchanted ears.’ (p.344) であった。Janet と Bernard は彼の ‘villa by the Mediterranean’ (p. 350) で逢引を重ねるようになっていく。

Patrick から又も ‘I hope you are still fancy’ (p.350) という言葉で終わる手紙とコンビーフが送られてきた時、Janet は Bernard とベッドで愛しあった後、そのコンビーフを二人で食べて背徳を犯しているという感覚を楽しんだ (‘I savoured the feeling of transgressing’ p.350)。もう彼女は 1 人ぼっちで荷物とタイプライターを抱えて途方にくれている ‘Janetta’ ではなかった。彼女は Bernard の ‘woman’ であり、音楽会に行ったり、Bernard の友人達である多くの派手で官能的な暮らしをしているアメリカ人達と交際をするようになっていく。今や Janet は贅沢な Los Americanos に加わったのである。

ある日 ‘What if I do have a baby?’ という Janet の問いに Bernard は ‘That would be terrible.’ と答える。きわめてありふれた男と女の会話であるが、sophisticated でなく、innocent な NZ 人である Janet はその言葉にショックを受ける。その時はじめて自分の恋愛が現実感をとまってくるのであった。彼女にとって子供は ‘a loving replica of Bernard and me’ ‘a gift from Bernard’ (p.352) であり、ゆるぎない愛を感じる彼からの贈物であるが、Bernard にとっては ‘terrible’ なのだ。それは ‘that perfect love’ (と実は彼女だけが思っていた愛) を見事に打ち砕いてしまう。そして当然のことながら ‘my longing and love and passion for Bernard were gone.’ (p.352) となるのであるが、しかしこの愛は実は最初から perfect なものではなかったのだ。Bernard とはじめて散歩した時、理由のない怒りを爆発させて牛の体を鋭く打つ Bernard の姿を見るが、Janet はあえてそういう現実から目をそらそうとしていたのだ (p.346)。Janet はその後 Bernard が訪れても二度と会おうとはしなかった。しかし短い間ではあったが、Bernard とのことで愛と愛の複雑さを知り、その別れは彼女が思っていた以上に辛いものであった。その孤独な心境を Janet は次の様に書いている。

‘and now, in his absence, searching the empty places, I found only a blank uninhabited darkness with fleeting glimpses of Bernard.……He was there beside me, around, within me. Hearing his laughter in the street I’d look out to see a stranger laughing and talking among strangers.’ (p.354)

かつて、「私の島」、イビサは熱い花の芳香が立ち、なだらかな丘は緑色の新芽をつけた明るい松林で輝いていたが、今やイビサは彼女にとって耐えがたい場所になっていた。‘Ibiza was suddenly changed, steeped in my own feelings, destroyed by my glance.’ (p.353) 彼女にはミダス王の指ではなく、灰に触れられて木々が腐り、オリーブの花が枯れていくのが見えるようだった。

Janet はイビサ島を去ることを決意する。

(5)

イビサ島を去ってアンドラに移った Janet は同じ家に間借りする密輸入兼ガイドの El Vici と交際を始める。それは彼女にとって Bernard と歩いたイビサでの最初の散歩のくり返しのように思われた。しかし El Vici の気持は彼女が思っていたよりずっと真剣であった。二人でピクニックに行った時から El Vici は彼女を自分の恋人として扱う。そしてある日 El Vici は祖母の指輪をさし出して結婚を申込もうとする。彼女は指輪は受け取らなかったが、拒絶もしない。彼女は自分が一番なじんでいる役柄、つまり罰を恐れてあえて拒むことをしない内に人生が自分のために計画されていく受け身の人という役柄をまたしても演じていることに気づく。彼の好意に感謝しつつも心は沈んだ。El Vici はいずれ彼女に相応しく埋められていくであろう空間に都合良く嵌っているだけだと Janet は知っていた。彼女の心を占めているのは今だに Bernard であった。それでいながら El Vici を拒むことができないのだ。そういう自分に対して彼女はつぶやく。

‘Was I prompted perhaps by an impulse of greed, for love at any cost?’ (p.361)

El Vici との将来の人生を思うと、ぞっとするような思いになる。ついに Janet はロンドンの下宿の整理を口実にロンドンに戻ることにする。ロンドンまでの往復切符を El Vici と買いに行き、そっと旅行代理店の事務員に尋ねるのだった。‘If I don’t use the return ticket, will my money be refunded?’ (p.361) と。

(6)

ロンドン、イビサ、アンドラでの幾人かの男性との恋愛が Janet の内面を豊かに成長させていくのである。さらにロンドンでの良き医師との出会い、NZ で受けた診断の「精神分裂病」の否定などが彼女の自分に対する自信を取り戻させ、NZ への帰国を決心させるのである。しかし NZ で暮すのは賢明ではないかもしれないという意見もあった。なぜなら彼女の本が出版されるようになってからはいつも彼女のことを ‘unbalanced, insane’ な人物として言及し、それゆえに彼女は書くのであるとされる傾向があったので、ひょっとしたらまた危険にさらされるかもしれないからである。しかし Janet はすでに NZ へ帰ってそこで仕事をしようとして決心していた。そもそも彼女が NZ をはなれた理由は文学的、芸術的な理由ではなく、今帰る理由は文学的なものであった。

Janet はイーストサフォークの畑を眺めながら、ミシンの台に向かって座っていた時、偽っているという感覚、表面をかすっているという感覚を味わったのである。(p.415) Frank が ‘……you’ll never know another country like that where you spent your earliest years. you’ll never be able to write intimately of another country’ (p.415) と述べる如く、Janet は自分の生まれた国で作家活動をしなければならないと知ったのである。

かってロンドンに着いたばかりの Janet は自分の詩を送った出版社に自分を西インド諸島から来たばかりの詩人と偽ったが、彼女はその文学上の嘘を NZ の人間を真のアイデンティティを持っていない状態にしている国民的な嘘からの一種の逃避であるとしている。しかし今や Janet は祖父母や父母が NZ で NZ 人としてのアイデンティティを求めて生きたように、彼女もまた NZ に戻って NZ 人としてのアイデンティティを求め、NZ で作家として生きることを決意するのである。

注

ページ数を示した引用文は Janet Frame, *An Autobiography*. Honkong, Century Hutchinson New Zealand Ltd. 1989, からである。

- (1) オセアニア英語研究会, 『オセアニア研究』第 8 巻, オセアニア出版社, p 73.